

40th Anniversary

5

[ファイン]
May 2018
No.479
PRICE
680YEN

街では普段着としても使えるし、アウトドアでは期待とおりの実力を発揮してくれる! **旅とファッション。**

NATURAL LIFE OF CITY & BEACH!

Fine

今までの人生でワクワクする気持ちになったことはあるか?

さあ冒険へ出かけよう。

ブラジル生産にこだわりリサイクルすることで二酸化炭素やゴミを削減。
オスクレン

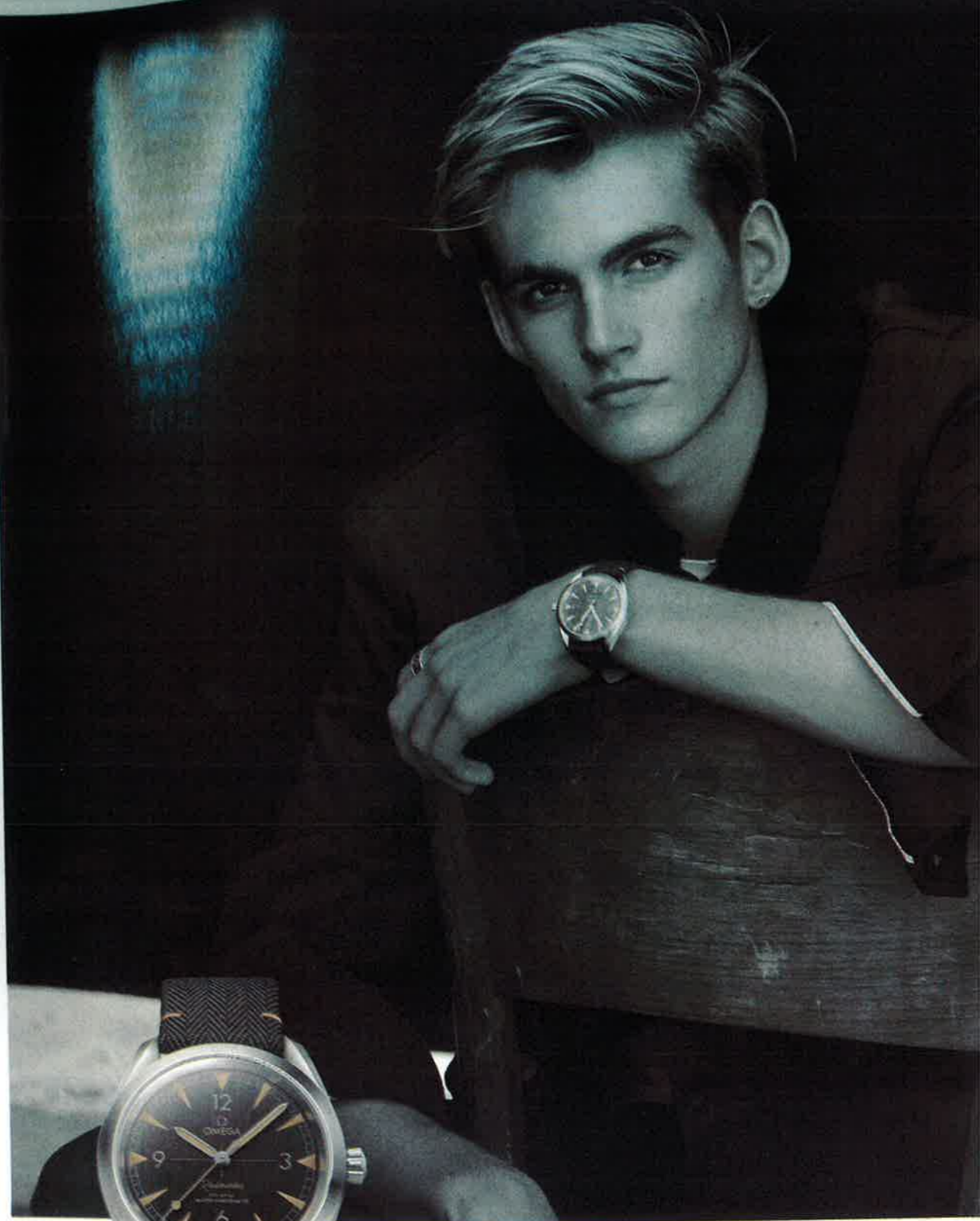
下町と山の手がミックスされた街をピストでまわる。
代々木上原

2018年は大事な記念年。40周年のFineと一緒に祝いしようよ!
リーバイス

男のキャンプめし。
ナスのスキレットグリルとこがしミートソース!



Fine 5 [7711] NO.479 May 2018 特集 さあ冒険へ出かけよう。



PRESLEY'S CHOICE

RAILMASTER MASTER CHRONOMETER

オメガブティック銀座本店 / 大阪 / 心斎橋 オメガショップ銀座並木通り / 小田急新宿 / 伊勢丹新宿 / 大丸心斎橋 / 大阪高島屋 / 大丸神戸 【オメガおまかせサービス】

定価680円 本体630円 雑誌 07385-5
オメガ時計株式会社 印刷
Printed in Japan



白瀬 轟

Nobu Shirase

南極に足跡を残した初めての日本人!

地球環境の変化を知るうえで、重要な拠点になっている南極。ここで観測し、研究されている気象、地質、天文といったさまざまな分野のデータが、未来の地球を予測し、備えるために欠かせない情報源になっている。そんな南極に日本が観測拠点を構える礎を築いたのが、1912年に日本人として初めて南極にたどり着いた白瀬轟の南極探検隊だ。現在の南極観測船「しらせ」の船名の由来にもなった白瀬の冒険譚は、とにかくスケールが大きい。少年時代からワンバクだった彼は、寺子屋の先生に聞かされたコロンブスやマゼランといったレジェンドの偉業に胸を熱くし、いつしか探検家を志すようになった。お寺の長男だったが、探検家になるためには心身を鍛えるべきという考えで陸軍に入隊したというから、その決意は相当固かったようだ。

探検家としての白瀬は、北極探検を目標に掲げていたものの、1909年にアメリカの探検家が北極点に到達したことを知り、目的地を南極に変更。当初から世界の探検家たちをライバル視していたのだ。しかし当時は世界が人類初の南極点到達を目指し、探検隊を送り込んでいた時代。ノルウェーのロアルド・アムゼンやイギリスのロバート・ファルコン・スコットといったビッグネームたちが虎視眈々と極地を狙っていた。

そんななか白瀬が南極に向かったのは、1910年のこと。27名の探検隊を率いて日本を出発し、一度は氷海にはばまれたものの、シドニーへ戻り時期を見計らった後に再び船を出すと、1912年1月に南極大陸のロス海にたどり着いた。そこでアムゼンがひと足先に南極点に到達してしまったことを知るが、白瀬は食料が持つギリギリの段階まで冒険を続け、南緯80度の地点まで到着。その後、隊員全員と無事帰還を果たす。この実績があったからこそ、1951年に日本の南極観測が承認され、その歴史の幕が上がったのだ。

PROFILE

1861年生まれ。秋田県出身。1910年に大隈重信を会長に迎えた南極探検後援会を発足し、同年11月に芝浦から出港する。アクシデントに見舞われながらも、南緯80度、西経156度の地までたどり着き、「大和雪原」と命名した

この本を読み!

『日本南極探検隊長 白瀬轟』



白瀬の南極冒険エピソードだけではなく、生い立ちからどのような功績をもたらしたのかまでが、客観的に語られている。極地研ライブラリーシリーズより。井上正鉄 著 (成山堂書店・刊)



Japanese Adventurer

日本の冒険家

植村直己

Naomi Uemura

山へ情熱を注ぎ、世界初の五大陸最高峰登頂者に!

冒険になじみがない人でも、植村直己という冒険家の名前を知らない人はいない。そういっても過言ではないほど、植村が残した数々の功績は輝きを放っている。なかでも象徴的に語り継がれるのが、1970年に世界で初めて五大陸最高峰の登頂を成し遂げたことだ。モンブラン、キリマンジャロ、アコンカグア、エベレスト、デナリ(マッキンリー)という5つの高山を制覇したことを意味するこの偉業は、今でも多くの登山家が成功させている。しかし、植村が挑んだ48年前の登山ギアの性能は、現在と比べると雲泥の差。GPSもなかったことを考えると、想像を絶するほど過酷な状態で、猛威を振るう大自然と向き合っていたことになる。

明治大学の山岳部に入部後、登山や冒険に強い憧れを抱いた植村。その熱い思いは、1970年に日本人初のエベレスト登頂を成功させたときのエピソードにもにじみ出ている。植村がエベレスト登頂を目指す偵察部隊の1人としてヒマラヤに向かったのは、山頂にアタックする前年のこと。そして彼は、ほかのメンバーが帰国した後も1人で現地に残ったという。シェルパが暮らす村でひと冬を越して、本隊の到着を待っていたのだ。それは、高所にカラダを順応させることを意味するだけではなく、エベレストという最高峰の山とともに暮らす人々の生活や文化と触れ合うことで、自分が挑む山をより深く理解しようとしていたのかも

しれない。その熱意が伝わったのか、植村は山頂アタックのメンバーに選ばれることとなり歴史的な偉業を成し遂げる。そんな情熱的な男である一方、人に慕われる人格者でもあった。登頂を果たした際、エベレスト山頂での交信で語られた言葉がそれを物語っている。「私だけが登ったわけではありません。みなさんの力が私を頂上に押し上げてくれたのです」。感謝の気持ちを忘れない謙虚な人柄も、歴史的な冒険家として語り継がれる理由のひとつなのだろう。

この本を読み!

『植村直己-夢の軌跡』



植村と夢をともに追い、16年もの付き合いがあった著者によって書かれた1冊。交流を振り返りながら、冒険の軌跡をたどっていくことで、植村の人柄を印象的に浮かび上がらせている。湯川豊 著 (文藝春秋・刊)



河野兵市

Hyouichi Kono

北極点単独歩行に成功し、人々に夢と感動をもたらした!



「冒険とは、自分のいるポジションから一歩前に踏み出す勇気のことだ」。そんな力強い言葉とともに多くの人に勇気を与えてきたのが、昭和から平成にかけて世界を渡り歩いた河野兵市だ。人力を極限まで駆使するようなその冒険スタイルが生まれたのは、自転車で行った一周走破に挑んだ1978年のこと。一度は就職したものの、「これで一生を終えていいものか」と思い悩み、冒険家としての一歩を踏み出した。この冒険を皮切りに、アメリカ徒歩縦断やサハラ砂漠リヤカー縦断といった数々の冒険に挑んだ河野は、39歳を迎えた1997年に、カナダ側から北極点の単独歩行に日本人として初めて成功。そんな偉業を達成できた背景には、生まれ育った環境の好影響もある。河野の出身地は、愛媛県西宇和島郡の瀬戸町。実家はみかん農家を営み、小さいころから急峻な場所にあるみかん畑で家業を手伝っていたのだという。加えて、学校までは17kmもあったが、その道のりも毎日、自転車で通っていた。今思えば、これが前人未踏の冒険をやっている強靱な足腰を手に入れるのには、うってつけの環境だったのだろう。

43歳になった河野は、北極点から故郷の愛媛県瀬戸町に至る約1万5000kmもの道のりを、徒歩とシーカー

ックで5年間かけて帰ってくるという壮大な冒険に挑む。集大成ともいえるそのプロジェクトは、「サケや渡り鳥が通る生まれ故郷を目指すような冒険」というロマンに満ちあふれたコンセプトだった。残念ながらその冒険は、河野が帰らぬ人となり、志半ばで終焉を迎えることになった。しかし、現状に甘んじず挑戦し続けることで、多くの人に夢と希望を与えた河野の冒険譚は、永遠に輝きを放ち続けている。

この本を読み!

『絆 河野兵市の絆からいぬと夢』



数々の大冒険へ繰り出していく河野を見守った家族の視点から描かれている1冊。強い絆で結ばれているとはいえ、極限の環境へ送り出していた家族の気持ちを思わずにはいられない。河野順子 著 (河出書房新社・刊)



河口慧海

Ekai Kawaguchi

仏教への強い思いを携え、チベットに入門!

この本を読み!

『河口慧海 日本最初のチベット入門者』



慧海の甥である著者が膨大な資料をもとに書き上げた。2回目の旅行や晩年の功績までが丁寧に記されている。当時のチベット入国がいかに大変だったかが、イメージしやすくなるはずだ。河口正 著 (春秋社・刊)



PROFILE

1866年生まれ。大阪府出身。僧侶としてチベット原典の研究を志し、鎖国状態のチベットに単身で入国を果たす。その後は僧籍を返上し、学者として大正大学教授、東洋文庫研究員を務め、仏教文化の普及に力を注いだ

十分とはいえない装備でヒマラヤ山中のチベットに潜入。そんな大胆不敵な成功させたのが、明治時代に日本人のラサにたどり着いた河口慧海だ。寺の河口を、そこまで強烈に突き動かしたのか。それは仏教者として抱いた夢だった。漢訳された仏典の正確な日本語の原典の正確な訳を日本に普及し、手に入れるため自らチベットへ向かう。38歳を迎えた河口が、帰国後に著したト潜入記は、実にスリリングだ。当時の国体制なので簡単に入国することは出来ず、まずインドに向かってチベット。その3年後、1900年に中国僧とからチベット入りを果たし、本場で仏教大願を実現させたのだ。そんな夢の道は続かず、日本人であることが発覚したためにわずか2年弱で終わった。破天荒ながら勇気ある行動のおかげで、重要な仏教資料が日本にも伝わり、理解につながった。仏教を広めたいという熱い1人の僧侶の挑戦に、あらためて